

第五章 九割中流から「失われた二〇年」

一 「失われた二〇年」

高齢社会対策の「基本法」「大綱」から二〇年 *二〇年の「迷路」からの脱出口

高齢者はすべて「社会の被扶養者」か *みんなで渡った「霞が関の赤信号」

九割中流からの急転直下 *「老後破産」と「下流老人」

二 高齢社会対策担当大臣に責任

意識やしくみを変える対策が延滞 *事業延滞の責任者さがし

二〇一二年に「大綱」を改定 *知らされない高齢者

歴代の「対策担当大臣」への要請 *内閣府に専任の担当大臣を置く

三 広がった亀裂・格差をどうする

「機陀多（カンダタ）」の話 *また大震災に見舞われて

「非を飾る」若者たち *「時代に関わらない」という高齢者

IT化と「デジタル・デバイド」 *スマホ娘は「オンチ親父を蔑視

現役中年にはにぶい賃金上昇 *世代間に亀裂が広がる

四 高齢者間に見る較差

かつて功いまは罪の「急流勇退」 *「隠退」で知識・技術を持ち去る

「隠退ウーピーズ」として *「一陽来福」型の高齢者層

「ほどほどの赤字人生」が男の美学 *「先憂後楽」型の高齢者層

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン *「戦々兢兢」型の高齢者像

◀ 大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

かあさんは許さない *「亜流歴史劇」再演プロローグ

「良妻賢母」に育てられて *大正生まれの母たちの人生

大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞） *働きづめに働いた人びとの本音

第五章 九割中流から「失われた二〇年」

「失われた二〇年」

高齢社会対策の「基本法」「大綱」から二〇年

本誌のつくりつけとしては、ここから始めることもできた。

しかし時間が切迫するのを感じるとき、じっくり現状の分析をするのはむずかしい。いま急ぎなすべきことを優先し、そのあと共に歩みながら語り合うのがいいと判断して「終章」に近いここに置くことにした。

目次をみて、筆者の心中を推量して、「終章」に近いここからまず読みはじめてくれた優れた読み手のみなさんには感謝しつつ、急ぎ足で「失われた二〇年」を顧みようと思う。

今から「二〇年」前を文字通りに遡れば一九九六年である。

その前年の一九九五年には阪神淡路大震災とサリン事件という「天災人禍」に襲われた。阪神淡路大震災はそののち毎年、慰霊の催しをつづけているから、そこからおよその時間距離がわかる。あの年から起算してここまでだから、「失われた」となれば相当の量が想定されるだろう。

失われてしまった「今」というのはどういうことになっているのか。

それをこれまで語る述べてきたが、ひと足先に二〇一〇年に「失われた二〇年」がいわれた

のをご記憶の方もあろう。

それは一九九一年に始まった日本経済の低迷がなおつづいており、いまやアベノミクス効果も薄らいで、「失われた三〇年」すら語りはじめられている。

そんなことから、ここから読んでいただいた人のなかには、経済動向の分析にかかわっている人もいるにちがいない。そこでそのあたりのことにひとこと触れて先にいきたい。

成長のない「ゼロ成長」。

先進諸国がともに長く陥っている「ゼロ成長」の状態からの脱出を、経済における「失われた二〇年」はテーマにしている。そのなかでも日本が際立っており、その要因を西欧諸国と比較しながら一〇年、二〇年と仔細に論じてきているのだが、脱出口がみえてこない。

日本が欧米諸国より先行しているものは何か、あるいは特徴としているものは何か。

経済の側面からそれを明らかにする必要がある、その中でたとえば「少子高齢化」「労働力減少」「需要不足」「中小企業」「生産性低迷」「過剰貯蓄」「団塊の世代」・・については論じられている。しかし最もたいせつなことは、他との比較がしづらいあるいはできない特徴を、歴史や社会動向を通じて抽出して、別途に仔細に検証することである。

それが何かとなれば、なによりもここで本稿が課題としている史上初の「高齢化問題」つまり「長寿社会Ⅱ三世代平等社会」の形成過程なのである。

「高齢化問題」と経済の相関関係についてもさまざまに論じられてきたが、「高齢化問題」に

は「高齢者対策（ケア）」と「高齢社会対策（参加）」とがあり、「高齢者対策（ケア）」のほうは「医療」「介護」「福祉」「年金」などで、財政上の負担増に対処しながらどの国も独自の成果を示してきた。とくにわが国は、医療の面ではノーベル賞の医学・生理学賞を受賞する人が何人も出るほどの貢献を残していることで知られる。

一方の「高齢社会対策（参加）」はどうか。

これは各国の伝統や暮らし方といった個別の国内事情によるものなので、数値の比較はしづらい。それゆえに重要である。

高齢者意識の醸成、就労による高齢者にふさわしいモノやサービスづくり、居場所や通い場所の設置、生涯学習のしくみ、「世代交代」ではなく「世代交流」、暮らしや介護やエンディングを含む地域での「助け合い」、住居や移動の問題そのほかがある。

ひとつ「労働力減少」の問題を取り上げてみても、単純に「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）の高まりとともに「労働力減少」が指摘されているが、本稿の「三世代（青少年・中年・高年）平等型」の長寿社会の形成過程に即していえば、高年世代によるすべての世代のための社会づくりであり、鍛えられ磨き上げられた生活感と積み上げられた知識と培われた技術とが活かされて、新しいモノ・サービスが造出され、新しいしくみが創出されることになる。だからいわれるように社会の総体としての「労働力減少」にはならないし、新たな経済効果が見込まれているのである。

「失なわれなかった二〇年」、これまでになかった右のような課題での新たな価値の創出が各分野、各所でおこなわれていけば、新世紀の今ころは、三四〇〇万人に達した高齢者のみならず、新しい居場所に集い、生活感性に見合った優良な国産品に取り巻かれて過ごし、後人に敬愛されて、生き生きと活動を展開しているはずであった。それがあれば経済が上向かないはずがない。

*二〇年の「迷路」からの脱出口

新世紀にむけて「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（前文）をめざすとして、「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）が制定されたのが一九九五年一月であった。次年の一九九六年七月には、中期目標としてなすべき事業を掲げた「高齢社会対策大綱」（橋本龍太郎内閣）が閣議決定されて、高齢化先進国のフロントランナーとして、国際的にもいいスタートを切ったのだった。

「大綱」はそののち五年ごとに見直され、「小泉純一郎内閣」（二〇〇一年）と「野田内閣」（二〇一二年）では改定されている。にもかかわらず、国のなすべき事業として取り上げられてきた高齢社会対策は進んでこなかったのである。それが本稿のいう「失われた二〇年」であり、高齢者三四〇〇万人の経済社会への不参加によるさまざまな影響がすで



に露呈しているのである。なすべき対策が分かっているがなされてこなかったゆえに、「社会保障」財政は雪だるまのようにふくらんで国家財政の赤字を拡大しつづけてきた。赤い色の雪だるまなんて世に「ありえないもの」である。

一人ひとりの高齢者は、長年にわたってみずから努めて培ってきた「健康」「知識」「技術」「経験」「人脈」を保持して暮らしている。みずから努めてきて得たものだから、その総体はご本人にしか分らない。外からでは見えず、ご本人にしか知れないそうした「熟練技術」や「専門知識」や独自の「構想」などが、多くは退職して「余生」を過ごすあいだに社会的に活かされずに失われているのである。

大事なので繰り返すが、一九九五年一月に、村山富市内閣が「高齢社会対策基本法」を制定し、翌年の一九九六年七月に、橋本龍太郎内閣が具体的な中期指針である「高齢社会対策大綱」を閣議決定した。実務を遂行したのは時代感覚に優れた官僚と若手学者とであった。一九九九年の「国際高齢者年」のフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開したのも当時の総務庁高齢社会対策室であった。

ここで見落としていけないことは、それらの事業に底流しているのは、時代をつくってきた先人への感謝であり、慰労し敬意をもって功労者を遇しようとする官僚や学者のおのずからなる「善意」であったということである。

しかしその間、高齢化率では一九九四年に「高齢社会」（一四％）に達したあと、ヨーロッパ

パ諸国にも例がない世界最速で高齢化が進んでいたにもかかわらず、政治の側はすべての国民に「高齢社会」への意識を醸成する「高齢社会（長寿社会）ブランドデザイン」を掲げることもなく、「大綱」にある事業も延滞してきたのである。

この間、「高齢者対策（ケア）」は、二〇〇〇年の「介護保険」の導入など、要支援まで含めた手厚い介護が実施されるなど成果をみたが、高齢者の参加を求めつつ遂行されねばならない「高齢社会対策（参加）」は延滞してきたのである。

この活動の成果こそ、ヨーロッパ各国をはじめ高齢化先行国は、世界最初に高齢化率二一％（二〇〇七年）に達するわが国に期待していたものであった。

その政策不在が年々増えつづける高齢者の将来への不安を醸成し、その経緯が裏返って家計資産を一四〇〇兆円にまで積み上げてきたのである。将来にむけて参加すべき事業が明解であれば、国民とくに元気な高齢者は積極的に参加し、保持する「健康・知識・技術・経験・人脈・貯蓄」を活かして、社会の活性化に貢献できていたはずなのである。

したがって延滞の原因も責任も政治の側にある。

二〇一二年末の組閣以来、「女性と若者の成長力」に期待し優先してきた安倍晋三首相は、二〇一五年九月に「一億総活躍」を呼びかけたものの、高齢者層に対しては際立った参加要請をしていない。「迷路」にはまってしまった政界からは、もはやこの国の総体の姿が見通せなくなっているとしかしいようがない。

底流している「日本社会」の姿をしつかりと見据えて、金融・財政政策で支えるとともに、高度成長を成し遂げたあとも元気な高齢者層を含めて「三世代平等社会」の形成に努めることができていけば、今ごろ「一億総活躍」をいい出しながら三四〇〇万人の高齢者の潜在力を無視するような恥ずべき政策はとらなかつたはずである。ありうべき社会に向かつていけば当然に、ノーベル「医学・生理学賞」ほかの業績とともに、「経済学賞」でもノミネートされる経済学者が出ていたはずである。

しかし要因は何事もなく二〇年をすごしてきた国民の側にある。そしてその延滞により露呈してくるすべてのツケを受けるのは高齢者である。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」か

今世紀の国際的な潮流が「高齢化」であることを知り、とくに注目される先行国として、新しい社会のしくみづくりをどこまで議論して実施してきたか。

とくに政治リーダーは、高齢の有識者とともに議論して、高齢者意識の醸成、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野ごとに、なすべき活動を仔細に検討し、国民に提案してきたか。国会議員が衆議してえた「高齢社会グランドデザイン」を、増えつつける高齢者に呼びかけながら実現に務めてきたか。



この歴史的にも国際的にも重要な世紀の変わり目の時期に、当時の首相は「所信表明演説」(二〇〇一・五・七)で高齢者にむかって何と叫びかけたか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」と言い切ったのである。このときに「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」(「高齢社会対策基本法」前文)へむかうはずであった活動のすべてが萎えたといっている。この責任は重い。

発言が間違っているといっているわけではなく、発言の対策が「高齢者対策(ケア)」であり、「高齢社会対策(参加)」でなかったことに問題がある。予算折衝に当たった時の焦眉の急が、高齢弱者の人びとへの善意の「福祉・介護・医療」それに「年金」だったことは確かではあったが、それとともに、

「元気な高齢者のみなさんはいつまでも社会の支え手であってほしい」

とひとこと訴えて、将来の財政難を説きつつ、増えつづける元気な高齢者層に「自助・自立・参加」意識を醸成するとともに、高齢者みずからが暮らしやすい社会の創出を官民協働で進めるよう訴えるのが政治リーダーの構想力だったのである。構想力のあった首相だっただけに、「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した官僚や学者や高齢社会活動家やジャーナリストや高齢者がいたはずである。

このままだと、これは記したくないのだが、

「年老いて負担だけがかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

ということにならざるをえないのではないかと思われた。

新世紀のはじめに、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

そして一二月には橋本内閣以来の「大綱」の改定を閣議決定している。さらに「世代交代」の大合唱のなかで、大物高齢政治家を年齢で区切って舞台から追い払ったのもこの人である。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられるが、「高齢社会対策」の延滞をもたらした政治リーダーを代表して、将来展望を掲げて国民に参加を求めえなかった過ちを認めて、ここはみごとな「君子豹変」ぶりをみせてほしいものである。

*みんなで渡った「霞が関の赤信号」

今世紀のはじめに、政界の「世代交代」（世代交流ではなかった）の突風にあおられながら、小泉チルドレンを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、かつて優れた厚生大臣と評された小泉首相だった。その後の内閣は、七年にわたった「一年一相」時代を含めて、迷路のなかをさま迷いつづけている。

アベノミクス（女性と若者優先の経済）は、もはや推進力を失ったところまできているのである。この間、高齢者は何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、

「この国の将来の姿はもう見たくない。孫、子に少しでも遺産を残せるうちに死にたい」とつぶやき、エンディング・ノートを書くような姿をだれが望んだらう。

今世紀に入っても政治リーダーは、「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけて、予算措置には努めたものの、一〇年後、二〇年後の「高齢社会」が構想できなかったのである。

「医療・介護・福祉・年金」といった施策では国際的水準で評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界トップの成果を示している。これら「高齢者対策」（ケア）については率直に世界に誇っていいことである。

しかし先の小渕内閣で5%の「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするよう当時の宮澤（喜一）蔵相を説いて認めさせた藤井（裕久）さんは、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」ともらしてくれた。

政治家にはなくとも、官僚と学者にはそういう認識があったから「高齢社会対策大綱」の改定はできたはずである。二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」の改定を閣議決定しているのである。その記述の中に、なすべき対策は埋めこまれている。政界が若手からの「世代交代」の要請の中にあつたとはいえ、官僚と学者が時代を底流している「高齢化」の状況に想像力が働かなかつたわけではない。想像力が働かなかつたのは政治リーダーの側であつた。そういわれて弁解の余地はないだろう。

九割中流からの急転直下

「失われた二〇年」の今を隠しおおせずに実例として見せてしまったのが、「老後破産」と「下流老人」の存在である。「高齢社会」の現状に対して高齢者からではなく、現役世代の将来不安を契機にした報告が話題になった。

本のタイトルが『老後破産』であり、サブタイトルが「長寿という悪夢」である。

二〇年前にめざした「基本法」の理念を逆なでするようなこのキャッチコピーが、本が売れない時代にウリを立てるために、「長寿者」のうち限られた条件のものであることを百も承知で付けたとしても、制作者としての「貧性」を問いたいが、圧倒的反響に包まれている間は言っても遠吠えにしか聞こえない。

いま、ひとり暮らしの高齢者に何かが起きている。その経緯はわからないが現場からしか議論は始まらないと決めて、NHKスペシャル取材班は現場にはいった。

議論の切り口は「経済的困窮」である。タイトルにしているキーワード「老後破産」とはどのような境遇の高齢者をいうのかというと、

——ひとり暮らしの高齢者で、収入が生活保護水準（月約一三万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない、受けようとしなない）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金六万五〇〇〇円十）だけでギリギリの生活をつづけている人。だから病気になる

ったり介護が必要になったりすると、とたんに生活が破綻してしまおう――

こういう境遇の高齢者を対象にし、番組（NHKスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたという。ざっと二〇〇万人余がおり、増えつつづけているという。「長寿という悪夢」のサブタイトルには、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンも）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込められている。これでは長寿の日々が楽しいはずがないという現実。それが取材の前提である。

「失われた二〇年」は、九割中流をなしとげて高齢者になった功労者を「下流老人」と呼ばれる境遇にするには十分の長さであった。

NHK取材班は、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んで、個人の喜怒哀楽の声を聞いていく。

――必死で働いてきたのに報われない老後――

だれもが口にするこのつぶやきは、二〇〇万人にとどまるものではないだろう。

ひとりの例として、都営団地に住む八〇代の菊池幸子（仮名）さんが登場する。

菊池さんは八年前にまだ独身だった四〇代のひとり息子を失った。そして三年前には夫をガンを失って、ひとり暮らしになった。夫の生前はふたりで一三万円ほどの年金で暮らしていたが、その後は毎月八万円（国民年金六万五〇〇〇円十）に。

専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（一万円）、介護サービス（三万円、要介護

二)、生活費(公共料金を含む、七万円)で、毎月必ず出る三万円ほどの赤字を預金(残り四〇万円になった)を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンがつづいている。

菊池さんにしてもそうだが、「多くの高齢者はその権利(生活保護)を行使しようとしな」と取材者は感じ取っている。

——「贅沢は敵」とばかりに、出費を切り詰め、耐え忍んでいる。「生活保護」を受けることは、「国の御世話になること」でもあり、罪悪感を伴うと訴える声も多い——と実情を報告する。

取材の対象は八〇代が多いが、この年齢層の大正から昭和初年生まれの高齢者は、戦中・戦後のきびしい暮らしを自立してしのぎ、その後も自分のために貯蓄などせず、みんなが等しく豊かになるために努めてきた。そういう人びとの善意が歴史にまれな「九割中流社会」をつくれたのではなかったか。

菊池さんの夫は工務店の主人として、働く人たちが豊かになることに配慮し、自らの老後のために預金を積むことなど考えていなかっただろう。そういう「みんなが等しく豊かに」を貫いてきた人びとの人生を、最後まで保てるような「高齢社会対策」を講じないでいて、「生活保護」という配慮の浅い「社会保障」で対応するオカミは信用されていないのである。

戦争と戦禍を経験し、一日でも長く生きることの命の尊さを知る人びと。その願いを閉ざして、「もう生きたくない」と吐露せざるをえないような環境に置かれている。

——一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後の現実なのだ——

というところに取材者の結論は行き着かざるをえない。

こういう社会を呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか。その責任は重い。

*「老後破産」と「下流老人」

一方、『下流老人』というタイトルは、筆者の造語だという。

筆者は、さいたま市で一二年間、生活困窮者の支援をしてきた三〇代のNPOの運営者（ソーシャルワーカー）であり、年間三〇〇人ほどの生活困窮者からの相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきた。

「下流老人」というのは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義しているが、実感の裏打ちがある巧みな造語である。いかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」である。

そして三つの「ない」が指標とされる。

収入が著しく少ない。十分な貯蓄がない。頼れる人間がない。

つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいう。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じところに発刊されたが、両書ともベストセラーになっ

ている。上記書と違うところは、親世代だけの問題ではなく、「介護離職」などで子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがいなければ十数年間は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにある。

「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」

とつぶやくのを、筆者は相談にきた高齢者から異口同音に聞く。

老後の貧困は想定外の事態であり、立ち至った事由はもともと貯蓄がなかったり、思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病氣（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、という。事由は個人的にみえるが、社会のしくみの問題であり、全世代にかかると問題を提起している。

「下流老人」は、姿を見せないようにして隠れているという。そしてとくに一定の年代より上の人は「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘する。筆者はそのような考えに到ってしまった過程に目を向け、生活保護を受けやすくすることが必要と訴える。

たしかに大正期から昭和戦前の生まれの人は「オカミの世話」を信用していない。戦争を起こし、自由を奪い、若者の命を奪い、戦禍の苦しみをもたらした。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。その成果を、「一定の年代より下の人」は不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとする。格差を認め、安心を専有しようとする人生を選んだ。

筆者は、現実の声を聞き、さまざまなケースを統計類を駆使して一般化し社会化することで、読者の納得をえることに苦心している。「一億総中流」社会がそのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めている。

いずれにしても率直に言えば、こういう本は現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本である。いくら売れ、いくつ出されても、解決策は見えてこない。

□ 高齢社会対策担当大臣に責任

意識やしくみを変える対策が延滞

「高齢社会対策」に関する事業の延滞で、「基本法」を制定した村山（富市）さんを責めるわけにいかない。いまも現役で元気に過ごしておられる高齢者の星、村山さんには、制定時の志を思い出していただければそれでいい。

橋本龍太郎内閣によってその実現への指針として「高齢社会対策大綱」が閣議決定されている。橋本さんにはその後も実現への志を見たのだったが、残念ながら早く世を去ってしまった。

それ以後の政治リーダーに責任はある。

二一世紀の「日本高齢社会」は、いうまでもなく、二〇世紀のアジアの奇跡といわれた平和で平等な経済大国「日本」をつくりあげた人びとが、一休みして、みずからの高齢期のための

新たなしくみを創出し、成熟・円熟期の人生を充足させることになる。

「基本法」も「大綱」も、双方とも当時の優れた構想力のある官僚と学者によって起草されたものであり、策定した人たちは新世紀のはじめにみずから高齢者として「喜びの中で安心して暮らす」姿を想定していたに違いない。

が、さにあらず。

しかもその達成にむかっていないことも感じているはずである。

政治の側の責務として、国際的にみてもわが国の「高齢社会対策」はいいスタートをきったのだったが、いまや周回遅れか途中棄権といってもいいすぎではない状況にあるといえよう。

「高齢社会対策大綱」の策定の目的にはこうある。

「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え、国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」

とある。さすが策定者である官僚は、このワンセンテンスの中にそのエキスを詰め込んでいく。しかし推進者は国民から選ばれてその役割を付託されている政治家であり、なかでも政治

リーダーである。

どの顔を思い浮かべても、この「大綱」の文章を読んで、「官僚の文章はごちゃごちゃしてよくわからん」といつて投げ出してしまったような気がするが。

読みもしなかったのかもしれないが、いずれにせよ、経済大国を成し遂げて、成熟・円熟期にある人びとに、「高齢社会」達成への要請をした政治リーダーを知らない。

*事業延滞の責任者がし

もう少し事業延滞の責任者がしをつづけよう。

安倍首相は唐突に「基本法」から制定二〇年目にあたる二〇一五年九月に「一億総活躍」をいい出した。そしてご存じのように、一〇月の内閣改造で「加藤勝信・一億総活躍担当大臣」を登場させた。オールジャパンをいうのだから、当然のこと、知識も技術も資産も持っている高齢者層への参加を呼びかけるものと発言を待ったが、そういう趣旨の発言はしなかった。

延滞責任の末端か先端かにいる政治リーダーであることをご本人は意識していない。

任命を受けた加藤勝信担当大臣は、大急ぎで各省の担当官僚を集めて、霞が関からの視野にいる人材によって「国民会議」を発足させた。その手法にぬかりはないが、ただし国民の四人にひとりに達した高齢者（六五歳以上、約三四〇〇万人）が持つ潜在力の活用を要請するために、広い視野で高齢有識者を探した形跡が「一億総活躍国民会議メンバー」に見えない。

そのメンバーに、本誌にも登場していただいた何人かの方が代表として参加していないのがその証である。高齢世代の人の声が反映されなくては、オールジャパン・オールエイジズの議論にはならないのではないか。

歴史での裁断はまぬかれえない。

新世紀の一五年、高齢者が四人にひとりになる時期までの対策の延滞は、「九割中流」社会を達成した功労者である国民を、高齢期になって「下流老人」にするには十分であった。

「基本法」の趣意にそって、国会で衆議して「高齢社会グランドデザイン」を掲げて、国民の「高齢社会」意識を醸成しながら今世紀のはじめから着々と対策を講じていけば、「下流老人」現象は露呈しなくて済んだプロセスなのである。そうできなかったのは他の道を選んだということであり、それは政治リーダーである歴代総理の責任であり、直接的には歴代の「高齢社会対策担当大臣」の責任であることに疑いの余地はない。

もうひとり、都知事になったばかりだった石原慎太郎氏を加えたい。一九九九年一〇月一日の「国際高齢者の日」の東京での記念行事に出て、将来の高齢社会へ期待する「あいさつ」をしているのである。ご自身の人生に今もつとも関係する「高齢社会」形成への政治家としての責務も見直してほしいものだ。七四歳の小泉さんと八四歳に達した石原さんの「君子豹変」ぶりを見て聞きたいものである。

一九九六年以後、毎年の『高齢社会白書』の公刊を持ちまわり閣議ですませてきた担当大臣

はもちろんみな同罪である。

そしてその責任は今、誰にあるのか。

いうまでもなく「一億総活躍担当大臣」であり「高齢社会対策担当大臣」でもある加藤勝信担当大臣にある。

といわれて、加藤大臣ご本人すら実感がないだろうし、納得がいかないだろう。二〇年の延滞で、政界における責任感はそのままで希薄になっているのである。

消費税論議の最中であつた二〇一二年九月に一年ぶりに「高齢社会対策大綱」が、閣議決定（野田内閣）して改定された。高齢社会にかかわる財源である「消費税」とともにその実態にかかわる「大綱」の改定内容に気がついた政治家がどれほどいたのだろうか。

「改定大綱」の重要な改定は「人生六五年」を二五年延伸させて「人生九〇年」への意識の醸成を国民に求めていること。と同時に、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野への「支え手の高齢者」としての参加を呼びかけていることにある。

何をどこまで参加したらいいのかは課題ごとにそれぞれだが、すべての高齢者に理解しておいてほしいことがある。

「人生九〇年」を前提にした上で、青少年（成長期）、中年（成長＋成熟期）、老年（成熟＋円熟期）の「三世代平等」の意識を醸成しつつ、具体的課題でオールジャパン、オールエイジズ

社会をめざすこと。

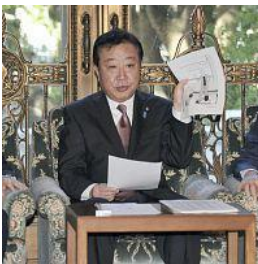
初代ゆえに二〇年を準備期として、高齢者が四人にひとりになった段階からの「日本高齢社会」形成にむかう道は閉ざされてはいない。成功事例としての「日本高齢社会」の創出は今ならまだ間に合うのである。本稿はここに、新世紀一五年の経緯をつぶさに見てきた立場からの一つの救済策を示そうとしているのである。

二〇一二年に「大綱」を改定

「基本法」の目的にむかって「大綱」の取り上げる諸事業を国民に周知し、実現しなかったのは政治家であるが、果たせなかったのは国民である。

国の対策の指針となる「高齢社会対策大綱」は五年刻みに見直され、その改定が二〇一二年九月におこなわれたが、自分の人生にかかわる重要な改定の内容なのに、高齢者のみなさんはおそらく知らないだろう。

一九九九年に「国際高齢者年」があった。二一世紀にはもはや世界規模での戦争が不可能になり平和のうちに世界規模での「高齢化」がすすむとして、国連が二〇世紀末に設定したものである。際立って急速に「高齢化」がすすむわが国では、ここを機会にして、新世紀にトップランナーとして迎える「高齢社会」の構想、国際的な視野での「高齢社会グランドデザイン



ン」を衆議して国際的に掲げるチャンスだったのである。

国としてはそれがなかった。高連協（高齢社会NGO連携協議会）が独自に「高齢者憲章」を起草しているのが知られる程度。

二〇〇一年末に「対策大綱」は関係官僚と学者とによって見直しをしているが、その後も見直したはずの事業はいっこうに進まなかったのである。一方で世代交代をすすめて高齢政治家を排除し、チルドレンを呼招した小泉総理の責任は免れえない。

二〇一二年改定の「大綱」（野田内閣）にはなすべき事業として、「人生九〇年意識」の醸成や、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとに具体的課題が記されている。有識者の検討会（清家篤座長）が提言をし、関係省庁が見直し、内閣官僚がまとめた「新大綱」を閣議決定した野田総理の責任も明らかだ。

「高齢者意識」に「人生六五年」から「人生九〇年」へと一足飛び二五年の延伸を生じていることから知れるように、歴代内閣が事業の継続性を軽視し、新世紀一五年の「高齢社会対策」の延滞（強くいえば政治不在）がつづいてきているのである。

安倍内閣は際立ってそう。

みなさんもお気づきのように、安倍総理は女性と若者の「成長力」とくに女性に期待して、ことあるごとに参加を呼びかけているが、「成熟力＋円熟力」を持つ高齢者には言及がない。新世紀歴代の政治リーダーは、「高齢者」は「支えが必要な人」という固定観念を持っており、

「社会参加」に意欲と能力のある人びとに「支え手」に回ってくれるよう意識改革を図ることもなく、「大綱」が列挙している分野での対策を講じることもなかったのである。

高齢者への敬愛の思いが薄れていくと感じている高齢者が多いのは、こういった社会対策の延滞によるところが大きいのである。

*知らされない高齢者

高齢者のみなさんは知らなすぎる。

正確に言えば知らされなさすぎるのだ。

あの大震災があった二〇一一年の一〇月に、民主党政権の蓮舫担当大臣（蓮舫議員が「少子化」と併任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていただろうか）のもとで、有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学長）を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣）に閣議決定をした。内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣である。二〇〇一年の小泉（純一郎）内閣以来の一一年ぶりの「対策大綱」再見直しであった。

残念なことだが、多くの国会議員が高齢社会対策の担当大臣がだれかを知らず、内閣府に専任官僚がない（併任ばかり）というのが現状。「対策大綱」を練り上げ、改定した有識者と内閣官僚には重要性を増していく課題と分かっているにもかかわらず、肝心の政治リーダーにその認識がな

ったことの証をここにも見るのである。

今回も一一年ぶりに内閣府で「対策大綱」の改定を検討しているというのに、衆参両院議員は何をしていたか。日々、まことに熱心に「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会の具体的なありようについては、ないといつていいほど関心が薄かったのである。

だからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとならなかった。無理もないことだが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからだ。

歴代の「対策担当大臣」への要請

準備期であったこの二〇年の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は小淵優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版・二六年度版は森まさこ大臣、二七年が有村治子大臣が閣議決定時の担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。いくら兼任とはいえ、そのことを議員どころ

か閣僚どころか本人すら知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。

参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員である。中川議員が「高齢社会対策大綱」改定時の担当大臣であった。

時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に兼任で担当となった岡田副総理（当時）は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理でさえ、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かう力になることには触れていない。五五歳の若き総理には高齢者の実人生には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたことか。どうしたらいいのか。

過ぎ去ったことを責めているのではない。今でも現役の国会議員のみなさんなのだから、わが身を顧みて、「一億総活躍担当大臣」のもとで、超党派で衆議して「日本高齢社会」形成への「ブランドデザイン」づくりをすすめてほしいものである。

これなら今からでも遅くない。

＊内閣府に専任の担当大臣を置く

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。「日本高齢社会」の形成は国際的・歴史的・歴史的大事業なのに、今世紀にはいつてからの歴代リーダーはその重要性を認知しないままできている。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに内閣府内の主要な職務として扱われなくなって久しいのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。

遅れを取り戻すには、まず内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない。「スポーツ庁」よりは「高齢社会庁」の設置が先なのである。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を重視すべきときなのにもかかわらず、国会議員はなおその重要性に気づこうとしない。

全国津々浦々から三四〇〇万人の高齢者は、「衆口一詞」の声を合わせて、
「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本長寿社会グランドデザインを掲げよう！」
と叫ぶ必要がある。

世界の高齢者が期待する先行高齢化国ニッポンの長寿社会形成への烽火を掲げるべき時である。時は切迫しているのである。

目 広がった亀裂・格差をどうする

犍陀多(カンダタ)の話

「カンダタって知ってるよね」と若い人に聞いたら、きっと「ドラゴンクエストの悪役キャラでしょ」と応じるだろう。

「その元ネタになった芥川龍之介の犍陀多(カンダタ)のほうなんだが」

といい添えれば、かつて教科書で読んだ『蜘蛛の糸』の主人公を思い出してくれるだろう。

大正七年(一九一八年)というからもう一〇〇年ほど前になるが、芥川龍之介が子ども向けの雑誌『赤い鳥』創刊号に書いた童話の主人公。お釈迦さまが出てくる話だから一〇〇年なんか昨日みたいなものだが、芥川はお釈迦さまがおいになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多を主人公にする童話を書いた。もちろん天上が極楽だから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れてきたものだ。

本人は覚えていないのだが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうとなされたのである。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってくる。

極楽へつながるのは一筋の蜘蛛の糸である。

そんなにたくさんさんの人の重さに耐えられずに糸は切れてしまう。「自分だけはなんとか」と考えた犍陀多は、「下りろ、下りろ」とわめいた。と、そのときに糸は切れて、犍陀多は地獄へ落ちていった。悪党だった犍陀多なのだから、とっさに自分の下で糸を切るくらいい思いついたとしても不思議ではないのだが、そんなことをさせるいとまを与えずに、作家は犍陀多の上で糸を切ったのである。

じつは芥川の「蜘蛛の糸」の話には元ネタがあつて、鈴木大拙が訳したポール・ケーラス著『カルマ（因果の小車）』から得ている。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へむかう。が、後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていく。

地獄へ落ちていく犍陀多を見る鈴木大拙と芥川龍之介とが感じていたところは同じではないだろう。それを論じることもできるのだが、ここでは芥川のほうのモチーフに限って追ってみ

たい。それは芥川が原典にはない極楽の蓮の池の傍らを歩いているお釈迦さまを登場させ、そのようすを書いていることにも見えている。大拙はそんなことをしないし、できない。大拙が関心を持つのは韃陀多の心の動きだ。

芥川が極楽と地獄という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、作家の眼の前で広がりがあつた「格差」を表現したかったからにちがいない。

そんなことに気づくこともなく、当てもその後も「蜘蛛の糸」を読んだ子どもたちは、率直に単純に「自分だけは何んとか」と考えてはいけないうちだと思ふことで作品のモチーフに納得してきた。が、複雑な人生を歩んでいるおとなたちの中には、これを読んでそうは思わなかつた人もいただろう。

芥川の表現する極楽は日々を過ごすにはつまらなそうに思えたからだ。

極楽にいつでも自分を理解してくれるような仲間はいないだろう。

それならたどる途中に他に何か別世界があるはずで、そこで下からくる連中に糸をくれてやつて塗中下車してもいいと思つただろう。

そう思える人は常に少数であり、おおかたの二者択一の俗世の凡夫としては、「自分だけ」という芥川の韃陀多を素直に納得して、自分もまた地獄に落ちてもしかたがないと思つたかもしれない。ご葬儀での長いお経のあとの説法で、仏弟子の目韃連（もくけんれん）が餓鬼界にいる母親を助けにいった話など聞かされていたからだ。

*また大震災に見舞われて

その後の大正一二（一九二三）年に起こった関東大震災は「天災」による地獄だった。さらにその後の日中戦争・太平洋戦争は「人禍」による地獄をもたらした。「天災」に遭遇した芥川はその後「唯ぼんやりした不安」に襲われて昭和二（一九二七）年に自死することになった。その後起こった「人禍」がどこまで予見されていたかは知れないが、将来の生きづらい時代と人生を予見していたことは確かである。

「天災人禍」である関東大震災とそのあとの日中・太平洋戦争・・・。

いま「3・11」東日本大震災のあと、世に「格差」が広がるなかで、「唯ぼんやりした不安」に襲われている国民の存在。一〇〇年をすごしてそれがまた、わたしたちの眼前に再現しつつある現実である。

繰り返す歴史。

仮想敵国をつくって国民を誘導する。滅私応援はすでにプロ野球やサッカーやライブで培っている。おりしも平和を七〇年祈りつづけた明仁天皇が生前退位の希望を述べられる。それとともに終わる戦後の鎮魂の時代。

「自分だけはなんとか」と思って、極楽へゆくことのできない現代の韃陀多は、遠からずして地獄に落ちていくのを察知している。でもそれまでに間があるはず。

願っていた姿に向かわない世を、敬愛されることもなく、豊かでもなく、ひとり取り残される高齢女性。女性ではほぼ半分が（男性は四人にひとり）九〇歳までの長寿を、そんな時代の風潮のなかを生きる過酷な時代。

やれやれやっつとという「六五歳」から先を、明日をも知れない日々を送りながら、「自分だけはなんとか」という思いで暮らすことになる定年退職者にとって罪な時代。

酷でもなく罪でもない穏当な人生を、だれもが送れるはずではなかったか。

「非を飾る」若者たち

若者たちと高齢者の間の亀裂を見てみよう。

七七歳の「喜寿」を迎えようとしている上田さんは近ごろ喜べない。

喜べない理由はふたつ。

世相として世の中が高齢者に関心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロクナイ大人の話には耳を傾けなくなったこと。

上田さんは、若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるという。

「？ 非を飾る」とはどういうものを用いるのですか。

間を置きながら、とくに気になったものについて四つの若者のことばを並べた。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だっけしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬ。遺産を残して早く死ね」
一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在するにとすらできない。

いつの世も若者の「知」は時代を先回りして待つ。

そして自分の耳に逆らうような「諫をふせぐ」ために知性は使われる。

人間だれもが隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は転移するものなのか。

上田さんはそう考えて楽しめない。

*「時代に関わらない」という高齢者

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えること。それが無力であり無益であるとさえ思うようになった。

日ごろはるかにシビアな経験をしている子どもたちに、年寄りのことばはまどろっこしいのである。

「金輪際、わたしは関わりませんけれど」

と、間を置いてことばを継いだ。

上田さん。ちよつと待ってください。

たしかに上田さんがいうように、このところ高齢者は軽視・無視さらには蔑視までされていて、実人生でも「アベノミクス成果」とやらからなんの恩恵も受けていない。しかし四人にひとりにもまで増えた高齢者が保持している知識・技術・資産など膨大な潜在力が残されています。これを發揮してつくる「成熟＋円熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか？

「・・・わたしにはもう一〇年は遅いような気がします」

まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、上田さんはそういつて黙り込む。

つい先ごろ「安保法制」反対では国会前までゆき、安保世代として社会参加をしてきた上田さんのような人を呼び戻す方策を、本稿の中で練り上げられるかどうか。

IT化と「デジタル・デバイド」

時流と潮流。世相の動きをよくみると、たしかにこのふたつの大きなうねりが重なって新世紀の時代相をつくって流れている。

ひとつはアジア唯一の経済先進国として迎えている「グローバル化」の時流であり、もうひとつは先行国としての対応を求められている「高齢化」という潮流である。この時流と潮流の

ふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余りの際立った変容といえば、時流対応の「若年化」と「女性化」と「IT化」のほうだった。

「デジタル・デバイド」(情報格差)がいわれる。

IT機器のイノベーション(技術革新)に高齢者が追いつかないために生じる情報の差で、個人差はあっても若い世代の対応力を主とする新製品化によって生じている。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もできない祖父を脇役とみるようになった。

すぐれた生活者であり高齢者である上田さんのような人でさえも、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのである。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭内の日用品の「途上国産化」と、企業内の「非正規社員の増加」によって実感されている。わが国よりひと足もふた足も遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのである。

わが国の高齢者はこれはいつか来た道として理解して、アジアの民衆が同じような豊かさを共有するまでの時流として納得して対応している。

*スマホ娘はーTオンチ親父を蔑視

「グローバルゼーション」（地球規模化）といわれれば、地球レベルには違いないが、前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済の「グローバル化」である。ソビエト崩壊後の東西ドイツ統合をはじめとする地域内の混乱の收拾に手間どった欧州諸国と異なつて、わが国は静かに世紀末を経過した。しかしすでに途上国対応の経済はきしみながら新世紀へと舞台は回っていた。そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という時流にさらされることとなつた。

それに覆われてしまったから、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらせ見えなくなつてしまつている。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになつた。

ここまでする述べてきたように、政府の「高齢社会対策」の遅延が二〇年つづいており、対策を講じないうちに、さまざまな難題を引き受けざるをえなくなつていたのである。

ほんとうは若年者・女性とともに、高齢者もまた日本社会で、シルバーのように洩く、プラチナのように不変に輝いている時期を迎えているはずであるが、そうなつていない。シルバーやプラチナどころか、スマホ娘には、粗大ごみほどの扱いさえ受けているのである。とくにI

IT産業が発展段階で引き起こす情報格差は、個人間や世代間ばかりでなく、地域間や貧富間でも生じており、ここで論じるには問題の根は深い。

現役中年にはぶい賃金上昇

中年現役と引退高年者の間で。

国家の「中堅官僚」は、国を安定して支えているのは国家財政と国家事業をあずかる「国家公務員」のわれわれであると本人が思い、そのつもりでしごとをしているからわかりやすい。

しかしもう一方で国を支えているのは、国の骨組みをつくって安定した経営をしている企業であり、その企業を支えて事業をこなしながら安定した家計を営んでいる「中堅社員」である。一人ひとりにその自覚があるかはともかく、業界の実態としても国民の総体としても「中堅」である人たちなのだ。

いま各企業内の「中堅社員」が、将来をめざして「よしやろう」とし、「IT青年」がそれに応じ、「女性」が新たに加わり、そして「高齢者」が知識と技能とで支えているようにないとオーストラリアの骨組みとして安定した姿とはいえない。

金融緩和という「前払い政策」で、企業は潤ったが、「中堅社員」がしっかりとその恩恵を受けたかどうかは問題だが、そういう声を聞かない。

それでは「よしやろう」という意欲が湧くわけがない。金融緩和の後も「中堅社員」の側か

ら「よしやろう」ではなく、「もう我慢ができない」という不満に近い声すら挙がっている。こんなことで経済が上向くはずがないではないか。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。企業の生き残りを託されて、先輩から引き継いだ職責を黙々と担ってきた中堅層の人びとの胸の奥に、将来への不安がつのる。経営者の自己保身の発言からは展望が見えない。高齢社員の萎える気分もわかる。同僚との間でも同業者との間でも親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。新入社員に帰属意識がうかがえない。

安定した気分を保とうとするのだが、それとは裏腹にいらだちに近い感情が自分にも社内にも強くなっていくのを感じる。企業の生き残りのために身を挺するのは「中堅社員」だが、しごとへの覇気が薄れる。退職社友には理解できないほどに職場環境は悪化しているのである。先輩には申し訳ないが、社友への企業年金より現役の暮らしを優先せよという声すら挙がることになる。

異次元の「金融緩和」という前払い政策によって、企業や株主は潤ったが、新事業を企画して景気回復のために働くのは「中堅社員」である。

にもかかわらず「よしやろう」ではなく「もう我慢ができない」とは何としたことか。こんなことでは設備投資に資金が動くはずがない。

どこかにしごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がいて、しごとをしてもプラスにならない「事倍功半」の自分たちがいる。この不公平感が先に立つ。

それが身近にいる定年後の高齢者と重なる。不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならないのに、生活保護や年金で安定した暮らしをしている。

「ナマ保（生活保護）で家族二〇万だってさ」なんていう話まで耳にする。

「高齢者」は元気なのに毎日が日曜日でいったい何をしているんだという批判が聞こえてくる。現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウォーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

何より不公平なのは、個人資産として留保して手つかずという約一四〇〇兆円という「家計黒字」である。バブル以来、シコシコとため込んだ平均で約二二〇〇万円という貯蓄についてである。それをそっとしておいて「いまや年金暮らしです」という気楽さについてである。

自分の親を見ればそんな資産はないことを知ってはいるが、どこかに平均以上の貯蓄を「塩漬け」にしながらかきこもりの余生を送っている高齢者がいると思うだけで「中堅社員」の心は冷え込んで不満は溶けていかない。

時代の推移と連動しながら人も動くし株式や事業出資金にまわってネも動く欧米と異なつて、日本では現金・預金のままで動いていない。いわゆる「たんす預金」による安心感である。

先輩たちに対する功労者としての敬意とない混ぜになって「中堅社員」の胸の内を右往左往していたらだちは、「高齢者資産」についてふたつの意見に集約されることになる。

まずは同じ「将来不安」をかかえながらの「資産」の差である。

同じ将来への不安をかかえているが、高齢者は「資産」を持ちながら年金で余生をおくる。

一方、企業を支えて働いている「中堅社員」は、貯蓄する余裕もなく不安のまま日々を過ごす。

高齢者側の言い分は、この先どこまで分からない長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。

一人ひとりはお小額でも、増えつづける高齢者とともに増えつづけて、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、「中堅社員」側からの「高齢者資産塩づけ」批判である。

*世代間に亀裂が広がる

国の財政をあく「現役官僚」の理解は少し違う。

冷やややかというか冷静である。

一四〇〇兆円といわれる「家計資産」は、超一〇〇〇兆円に達した財政赤字を補てんする意味での安定した黒字財源としては動かないほうがいい。やたらに動いて減少してしまっただけからである。

やがてあと二〇年もすれば一過性のものとして、相続税とともに解消されることになる。こはだれも声には出さないが、それは自分たち世代の高齢期の安定財源となっている。同世代の企業内の「中堅社員」にもそこはわかってほしいというのが、国を支える「中堅官僚」の戦略としての理解である。

この二〇年、安心して暮らせる高齢社会に対する国の構想「高齢社会グランドデザイン」が掲げられていて、具体的な事業として納得できれば、高齢者になる途上で出資・消費すべきもなかったのだが、構想がないゆえに老後不安の支えとして積み重なってきたものである。

「使うべき時に使うべき所に使えなかった資産」として、「貯蓄過剰」といわれても高齢者なら実感として理解がいくことなのである。

高齢者側の言い分は、定年前のころは「グローバル化」対応とかいって若手にしごとを集中させ脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でなんとかやりぬいてくれないと困るではないか、となる。

企業を支えている「中堅社員」の側からはもうひとつ、年金財源の支払者として、「高齢者資産移譲」の要請が力を増すことになる。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。これは新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちが共有する持論でもある。

いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあると

いうもの。使わないし使えないのなら、必要としていない若手の実業に資金を回すべきだというもの。この要請は想定外の金融緩和があつて、勢いはややおさまっているが。

先ごろ個人レベルだが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まった。そのときには「愛情口座」とかいわれて、若い母親たちの関心を呼んだ。高齢者がため込んだ貯蓄を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒツペガシ政策である。

孫のために、なけなしの一枚の福沢諭吉幣を工面している立場からは、一五〇〇万円という高額は実感がないし、不愉快である。そんなことでは「高齢者資産」は逆に動かなくなる。

ところで「引きこもり」は、引退高齢者だけのものではない。この傾向は正社員にも広がつていて、即戦力を期待されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせた「新入社員ニート化」が少なからずあるという。先の藤谷さんの息子もその一人か。

そんな不安定状況に包囲されている「中堅社員」は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまう。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねないほどだ。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたばかりの「団塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがる。

世代間に亀裂が広がる。

これ以上に亀裂が広がらないために、中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産や

知識や技術を活用して、次世代が高齢者になったときにも憩える場所やしくみをつくること。これは「高齢者資産」を減らすのではなく増やすことになる。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」(W・リップマン)

という後人を思う姿勢を高齢者みんなで示すことだ。

「中堅社員」のみなさんは、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれ次世代のあなた方の資産となるのだから。

Ⅳ 高齢者間にみる較差

かつて功いまは罪の「急流勇退」

先ごろアニメ映画の総帥であったスタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をしたが、ああいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに惜しまれて引退する。プロ野球の松井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

かつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に感動とともに活動の場を与え、将来への安心と励ましを与えてきた。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まったころには、少々の優遇を受けながら、優れた経験そして人格をそなえた人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていった。後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこ

もり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができるだろう。

*「隠退」で知識・技術を持ち去る

進退に関して、

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」(『宋名臣言行録「司馬光」』から)
という評価がある。

志の高い人は出世を急がず潔く進退するが、志の小さい人はこれとは逆に動く。凡人はそうはいかないから、さしたるしごとがなくとも定年まで務める。そのうえありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひものように延びてつながってくれたのである。企業の業績によるのではなく福祉対策としてである。

一方で「中堅社員」はといえば、しごとが増えているのに減収を余儀なくされている。

そこで、アフター5の街談巷議の場では、われわれが負担している年金を受け取りながら、高齢者の多くは「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているのではないかと、という不満が、ビールを呑みつつ吐き出される。定年待ちの高年社員のしごとなしの高給と退職金にも不満が及ぶ。

しかしこれも個人のせいというよりは時代の経緯のせいである。

引退後の「余生」があまりにも長すぎる。先輩を功労者として敬愛はしたいが、それは「余

生」が短く、高齢者が少なく、熟練期の仕事があったころのこと。いまや高給社員はしごとなしのまま過ごして退職金とともに消えていく。

それでは困るのである。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもなんでもない。会社で培った能力を活かして延びた定年までの間に企業年金分くらいは稼いでから去ってほしいのである。しごとまみれの若手としては、しごとなしで四半世紀を「余生」として過ごす高齢者がうらやましいより忌々しい。そこから敬意なんか湧くわけがない。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすぎし終えた高齢者の三様の暮らしぶりを見してみよう。だれもが安泰どころか、それぞれに高齢期の課題をかかえているのである。

まずは「急流引退」をしたあと、「われ関わり知らず」をよしとして「引きこもり」の人生を送っている大島さんの暮らしぶりから。

「隠退ウーピース」として

大島さんは、名前に似合わず背が低いし、君子然としてあたりを払うような風采ではないが、聡明さだけは疑えない広い額に細い目で、とくに笑った顔が安心感を与える温和な人である。

超一流とはいえないがだれもが知っている並一流の企業を当時の六〇歳定年まであと二年を残して早期勇退してのち、「家庭人」（と大島さんはいう）に徹して一〇年余を静かに暮らしてきた。思えば一〇年は早かった。

「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してからは、これからは「老齡期」と率直に認めることにした。新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上という。自分でもそう思う。男性の平均寿命である八〇歳までは一〇年あるが、あと一〇年とは思いたくない。一〇年はやや短い。平均だからとあいまいにせず、そこからの余命を加えて八五歳までとして、あれこれ楽しんで過ごせればという人生計算を立てている。そろそろからだのどこかにもとに戻らない症状（フレイル期）が残って健康寿命が終わる。そこから約一〇年が介護をうけながらの「余生」となる。

会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちにいるし、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族がいる。そして額に汗して旬の食材を得る「自営菜園」が日課になっている。住宅ローンがなく菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝している。典型的な「君子的引きこもり」の人である。

肝心の生活費はどうか。

細目までは知れないが、公的・私的（企業）年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これが思いのほか費用がかかる）、そしてふたりのささやかな葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいままでのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。この以上というところに余裕がある。ありえたかもしれない他の暮らし方と比較して、い

まの「家庭人」としての暮らしに不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつづけていた資産が、金融緩和の株高で、老後の安定した豊かな暮らしを支える安全圏という四〇〇〇万円（高齢者の一六％という）に補充をえた。

正直に言えば、健康に不安はないが、二〇一四年六月、一一六歳で亡くなった世界の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「農作業ができる間は」と専念することになっている。

平均余命は、七〇歳の男性なら一五・一なので八五歳、同年齢の妻は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているから、さらに男性の自分は八五歳での余命五・九を加えて九一歳、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。

「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできる」

と予感している。だからいっしょに終末という希望は持っていない。申し訳ないが、五、六年ほどの期間は妻の介護に期待している。

*「一陽来福」型の高齢者層

岳父（妻の父）同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはない。囲碁、釣り、ゴルフなどの趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事会でも、学友や同僚から声がかかれば可能なかぎり積極的に参加もし、浪費もする。

同窓会の友人たちの名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くに有訴の記載がある。だれその認知症や医療・介護の話を目にすると、ドック検査による健康状態も良好な自分が、めぐまれたひとりに思える。

国の経済や社会に関しては、下降へむかう時期にあると感じているが、大島さんは「われ関わり知らず」と固く決めている。だから職場のことで後輩が知恵を借りにやってくるのにも、「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいつて態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。知人の思わぬ死に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともある。惜しいと思う知名人の訃報にもよく出会う。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは自覚しているが、大島さんは自分では幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っている。

「ウーピーズ」などと勝手に自得したところで、父祖伝来の土地の一部を切り売りして、億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違う。たかが「一園農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的には歓迎である。

大島さんは明日もまたいい日であるようにと一日をていねいに迎えて過ごす「一陽来復」型

の高齢者。だから御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気に入くない。官僚のそんなやり口には、

「後人としてあるまじき行為！」

と不満顔が似合わない大島さんも不満を隠さない。といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはないから、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。ひそかに自分は安全圏にいると信じている。

せめて大島さんくらいは生涯を安穩に過ごしてほしいのだが、このままの状況で推移するとすれば、自分は安全圏と考えている人が生涯を安穩に過ごしかれるかどうか。ましてや「現役六五年」をすぎし終えて、平均的平凡をよしとして過ごしてきた高齢者の七〇%までが、将来もこのまま平安平凡に過ごしかれると感じているが、とてもそうとは言い切れない。

「ほどほどの赤字人生」が男の美学

鮎川さんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえないことになる。

父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」である。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となった。だから「定年」という区切りはない。が、会社のほうに破産という結末がある。

父親が元気だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけ。とりわけ家が

豊かになったわけではなかった。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのを見てきた。家族にも贅沢も禁じたから、社員の子をうらやましく思ったこともしばしばある。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、「おまえは大学を出にゃいかん」

と口癖にいつて、家業の手伝いを強いず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

「MADE IN JAPAN」の質の良い日本製品を底辺でささえる会社に誇りをもっていた父親と労苦をともにする実直な社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる鮎川さん。見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五五〜七三年）のころに設立された中小企業では、鮎川さんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはずである。

同じような経緯をもつ機械製造の子会社（親会社ではない。海外進出をして元気）から下請け品を求められれば、資金繰りをしては設備投資を重ねて製品を納めてきた。だから見方によつては重ねてきた設備投資の借入金を返済するために働いてきたともいえる。もちろん借入金も父から引き継いでいる。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。鮎川さんのような小さな事業所も見落とすことなく襲

った総不況の行く末を心配しながら、父親は前世紀の末に世を去った。

その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきたが、下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力再生の手立てはないところに来た。かつてはそれほどの重さに思えなかった一〇〇〇万円ほどの借入金返済する余力が出ない。負担が年々重くなる。

*「先憂後楽」型の高齢者層

「生涯現役の跡継ぎ二世」の鮎川さんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「E」も、若者が減って紅白戦が成り立たなくなかった。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」

というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだ鮎川さんの負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。親父は先憂ばかり多くて後楽の少ない人生を愉しんで、日又一日を働きづめで亡くなった。

製造ノウハウを持つ親会社は、生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。その後、製品化までとなつて、子会社はともかく孫請けは回復どころではなくなった。「ほどほどの赤字人生」ともいってられない。朝起きるたびに

借金の重みが増し、倒産の日が刻一刻と近づいてくるのを感じている。

独自でのしごとにもドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるだろうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいるが、それほど長い猶予期間があるとも思えない。分かっているが、独自の道が開けない。

さしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、同じ境遇の「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。父の時代にゼロから始まって自分の時代にゼロに終わる会社人生を、鮎川さんは納得している。それはそれで昭和時代の一隅を小さく輝いて生きた「二代企業」の終始のつけ方としてである。

惜しいかな、鮎川さん。

あなたは「先憂後楽」に徹してきたゆえに、「高齢社会」を多彩にし、豊かにする「高齢化用品」のメーカーでありながらユーザーであるという点でもまた後楽の人、つまり自力での新製品発想がゼロの人なのではないですか。

「鮎川さんの会社が蓄積した技術力は、この国の高齢者が必要とするような新製品には活かさないのですか」

「孫請けだったわが社ではむずかしいですね」

返答は明快である。

感性の高い高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものか。そういう成功事例をあちこちで聞くのだが。

鮎川さんが父親以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて獲得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って、中小企業の道を切り開いてほしいのだが。平成の三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の熟練技術を駆使した「高齢化優良日用品」MADE IN JAPANの再登場の時期がそこまできていくように推察されるのである。

実直な高齢熟練技術者の技術と経験と意欲が「高齢化新製品」の製造に活かされる。

新たなスグレモノによって高齢者層の生活感性が満たされる。

同時多発で湧き上がるように内需がによる経済活力が生まれる。

「貯蓄ゼロ」へのカウントダウン

給与所得者は、二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六五歳まで延びた。そして金融緩和により内部留保に余裕ができた。とはいえ経営トップは新規起業に積極的には動かない。リスクを負わないこと、内部留保を確実にすることがいまの経営トップの心得であるためだ。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考えたり実行す

る場を与えられることなく、業務替えになったり収入減を余儀なくされながら、「定年待ちの日々」を送ることになる。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになる。

横田さんはそのうちのひとり。

技術畠ひとすじに四〇年を会社勤めですごして、改正安定法にかからずに定年退職した。途中で転職など考えたこともなかったし、退職後も前職をいかして仕事があればと願ってきたが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」（公共職業安定所）にいつて登録はしてきたが、該当するしごとは見つからない。再就職をあきらめて失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率五%以下など信じられない。

横田さんは、少ない退職金から住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病氣らしい病氣はせず健康だったから、給料天引きの健康保険料の負担は感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安はすでに身辺に渦を巻いている。

横田さんは多数派である「戦々兢兢々」型の高齢者のひとりである。

「退職したあと、いや前から選択的支出の削減に努めています」

と横田さんはいう。旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らしてそれでも一度下がった生活用品の値上げや日常経費、医療費（薬代）や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋める程度のしごとをしたい。五万円から八万円がいい。

「私企業でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」と横田さんは国の施策を楽観的に理解している。

*「戦々兢兢」型の高齢者像

長生きをすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうと横田さんはまだ楽観的に思っている。

まずは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。実施された「消費税増税」。長年つれそってきた妻の持病とそれにちなむボランティア活動への出費。いつわが身に降りかかるかもしれない「医療費」の自己負担。今回は金融緩和で回避されたが、企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもたちへの支援出費・・・。

はじめから「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だ

から、長生きなどしなくとも必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウンは、すでに始まっている。「薄氷を履む」ような日々がこれから長くどこまでも続くことになる。

通信機器の優れた技術者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の共同発案者。といって横田さんは、社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思つてきた。青色発光ダイオード（LED）で企業から三億円を得、ノーベル物理学賞を得た中村修二さんは天才で特別な人だからいいが。自分がかつて会社から受け取った企画賞が三万円であったことに不服はない。それも次の日には歓送迎会用の部会費になったことを当然と思つている。

「将来への希望はしごと現場の活力にある」

と技術者であつた経験から横田さんは確信している。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズだった「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、ヘルメット姿が似合う人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。だれもが成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者たちがこの国の骨格を支えているという信念に今も変わりはない。番組が終了してずいぶん経つ。というのに、横田さんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌つたテーマ曲の一節、

「♪つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が体の中を繰り返して流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられない。

◀ 大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

かあさんは許さない

青木志げさんは、関東大震災があった大正一二年（一九二三年）一二月の生まれ。

「卒寿九〇歳」をむかえた年の終戦の日に選ばれて、長女に連れ添ってもらい、地下鉄に乗り、九段下から坂を登って、しっかりと歩いて日本武道館での「全国戦没者追悼式」に参加した。

先の戦争で次兄と夫を失った青木さんには、毎年聞いてきた天皇陛下のおことば、「ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い・・・」には心に沁みる実感があつたという。

次兄と夫のふたりは英霊として靖国神社に祀られているが、しかしA級戦犯を同時に祀っている靖国神社へは青木さんは参詣しない。昭和天皇と同じ立場に納得がいくからだ。

あの戦争は軍人政治家のだれかが責任をとらねばと思っっている。生命を生み育てる側からの告発としても。

国際的にはそれが当然の責務であり、すべてが英霊という日本の理解は外国では通用しない。

父が次兄の戦死を男性の論理として許容したとき、

「かあさんは許さない」

と、母は志げさんに聞こえて父には聞こえない声ではつきりといった。声の震えをおぼえている。長兄は関東大震災の日に小学校へいったまま行方知れずになった。二人の子を「天災人禍」によって失うことになった両親が晩年に保っていたとよく似た感情にいま自分が立ち合っているのではないかと青木さんは感じている。

戦後は恒久平和ではなく「戦前のはじまり」として注意深く見守っていた。遠い先で別の母から子の生命を奪い取るシーンが見えているかのように。

進み出したら決して引き戻せない「戦争という惨禍へのプロセス」を、この国の男たちはまたたどることになる気配。いつの日にか唐突に起きる戦争へとむかう重い振り子。

「歴史は学ばない者によって繰り返し、学んだ者によって繰り返す」

高校の歴史教師だった父から何度も繰り返し聞いたことばである。青木さんは父のあとを追うようにして、高校の歴史教師になった。父の死後である。

今とよく似た世相があった。というより「今」が似せられるようとしている世相があった。昭和のはじめのころのことである。多くは後で教師になってから知ったことだが、子どものころの記憶とも重なってよみがえる。

大震災からの復興（震災後の年数が青木さんの年齢）がつづくなかで、世界恐慌のあおりを

受けてそのあと不況に。失業が東京の街を覆い、閉塞感が街の隅々にわだかまる。

政党政治への失望が口々にいわれ、国家改造（昭和維新）へと青年たちが動く。中国大陸では関東軍が独断で「満州事変」を起こし、巷には熱狂型の世論が湧き議論がささくれ立つなかで、挙国一致の軍国化がすすみ、国際的孤立が拍手で迎えられる。

今と似たりフレ金融緩和（当時は財閥の救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ、そしてエロ・グロ・ナンセンス。そういう父母たちの時代。そこに向かって折り返す「今」。

青木さんはそんな時期に生まれた四人の子どもの末っ子の長女として育った。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。小さいころは「童謡」だったが、そのうち兄たちといっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこに混じって遊んだりした。

子どもたち（小国民）の意識と暮らしの小さな振り子が、家庭（童謡）から国家（軍歌）へと振れていく時代。雪の二・二六事件。そして国家総動員へ。

空襲、疎開、竹やり訓練そして敗戦・・・。

先の戦争の「敗戦と惨禍」のかけがえのない代償として得た「平和」の時期を一日又一日、一年又一年、必死にすごってきて七〇年、今、次の戦争への予兆を感じるといふ青木さん。

現役である六五歳以下の国民は、戦火を知らない。平和を当然の情景としてきたから感じていないという。いつかと同じ道をたどるように思える。

＊「亜流歴史劇」再演プロローグ

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに日本発の恐慌すらありうる経済不安。マイナス金利。下流一〇〇〇万家計への三万円ずつのお恵み。不況と閉塞感、財政難、デフレ脱却のための想定外の金融緩和による格差の拡大。軍国化と国防軍礼賛。

「尖閣」「竹島」「北方四島」の隣国三国との領土問題と国際的紛争の気配。そして発言のレベルから「歴史から学ぶ」想像力が感じられない政治リーダー。拙速の「特定秘密保護法」の成立や「集団的自衛権」の閣議決定。ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、軍国化に抗する言論への圧迫。絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・ナンセンス。両親が直面していたとよく似たシーンに立ち合っているのではないか。

一つひとつのことよりも世相としてのありようの類似性。

いずれはだれも回避する力を持ちえなくなつて、不幸な結末を負うことになるのは、いままだいない、何も知らない将来の子どもたち。

青木さんが父親から学んだ「歴史から正しく学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しないこと、国防を国防軍に頼らない意識の醸成、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民の中に格差をつくらないことだという。

現在の世相の方向はそのどれにも反していて、歴史から正しく学んでいないという。それで

も安倍総理は内閣支持率をせり上げている。野党は崩壊し、翼賛型の一党政治になっている。

青木さんは、右のようなことを友人の佐藤さんと長女と熱心に話して、

「でも、かあさんは許さない」

遠い日に母から聞いたことを傍らの長女に言い聞かせるようにいって、間をおいた。

友人の佐藤さんは、

「人生に二度も放り出されたのよ、わたし」

という話をした。日本政府の政策不在によって、一度は子どもどものころ、大陸の荒野で「みずから生きよ」として放り出され、二度目は介護も受けずにつづく一人暮らし。「みずから生きよ」として放り出されている。

「でもいいのよ、わたしも青木さんも慰めてくれる大好きな歌がたくさんある」

青木さんと佐藤さんを慰め支えているのは、将来が安心できる国の政策ではなく、小学校のころの優しい「如座春風」といべき先生から教わった童謡なのである。

自治体がエンディング・ノートを配布したり、親の家の片づけのノウハウを週刊誌の若手記者が記事にしたりするのは、高齢者の実人生を損なうことだと佐藤さんはいう。

青木さんが「有征無戦」（征有れども戦うことなし）についていう。

戦場へ兵を送っても双方に犠牲者が出ないように作戦をおこなうことが大義によって立つ討伐であり、戦闘をおこなわなくとも制圧して勝利を得ることができるとというのが派兵の前提に

ある。中国の皇帝は「有征無戦」を旨として、臣下からの上書を受けて正義の兵を送るのである。戦わずして勝つには、兵士もまた和平を願う「有志之士」でなければならぬ。

天皇の平和主義のお立場では、兵を送る場合には常に「有征無戦」を前提にして裁下されたのだ、と青木さんはいう。だから天皇に責任はないという。青木さんは、「人を殺せと教えしや」と晶子の詩の一節を口ずさむ。

平和主義の「憲法」を持つ国からの軍隊として送られ、イラクの“戦場”で一兵も損うことなく任務を遂行した「日本国の自衛隊」。その優れて稀有な国際的イメージを変容させる「集団的自衛権」についての「閣議決定」がなされた。

お互いの国の若い命への救済と平和への手段を語らず、戦場での協力による抑止力ばかりという内閣答弁。「集団的自衛権」の行使で、いずれは武器使用を当然とする戦場への派兵がなし崩しにすすむことになる。

そんなことを佐藤さんと長女に話してから、
「でも、かあさんは許さない」

今度は自分に言い聞かせるように青木さんはきっぱりといった。

「良妻賢母」に育てられて

日本では「良妻賢母」がふつうだが、中国では「賢妻良母」という。

これは語順の違いというばかりでなく、両国の女性観や近代の女性の果たした役割の違いが認められている四字熟語なのである。日本の場合は、明治維新のあと、西洋留学から帰った啓蒙家が女子教育の指針とした。「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となるという目標が定着した。初代の文部大臣森有礼は、「良妻賢母教育」こそ国是とすべきとまでいつている。

中国の場合は日本に留学した康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入したのだが定着しなかった。生涯名を変えず、男女がともに家を出て働き、ともに子育てをし、平等の社会的役割を果たした革命中国では、毛主席が「女性は天の半分を支える」（婦女能頂半边天）といって女性の活躍をうながしたように、自立意識を持つ「賢妻」でありのちに「良母」となることが志向された。語順は違っても両国ともに近代化のために「賢良な妻と母」を必要としたことは確かである。

*大正生まれの母たちの人生

日本の男性は「忠君愛国」で育てられ、女性は「良妻賢母」に育てられ、男性は外地の戦場に赴き、女性は銃後を守った。

青木さんは次兄を失い、夫を失い、家を失った末に与えられた「平和」の中で、新たな希望を託して子育てをし、戦争をしない国を支えてきた。

育ててくれた亡き父母の恩を思う「哀哀父母」（哀哀たる父母、『詩経「小雅」』）ということ

ばが言い継がれてきた。みずからが労苦を知るころには父母はすでにいなかったからである。ところがいま史上にまれな長寿時代。一人暮らしの女性の多くは、戦後の「平和」と「家族」を守ってくれた大正生まれの母たちである。生きているうちに親孝行が可能となった。

そこで「哀哀父母」ではなく「愛愛父母」ということになる。

生きているうちに恩返ししようという明快さが「愛愛」にある。哀哀から愛愛への展開もよく、語感もよく、何より世相をとらえてユニークである。日本発の現代四字熟語として用いた。〔『日経新聞「日経プラスワン」二〇一四年一月〕。

青木さんの長女は、「哀愛父母」の実行者である。

大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

大正生まれの人は今、平成二八年〓二〇一六年には九一〓一〇五歳である。

先の大戦後ゼロから始まった人生だからゼロに帰ること、「孤独死」だっていとわない人びと。

大正（明治四五年〓大正元年〓一九一二年七月三〇日から大正一五年〓昭和元年〓一九二六年一二月二五日）生まれの人びとは、だれもがたいへんだった。男性も女性も。

男たちは「富国強兵」の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦い、終戦の昭和二〇年〓一九四五年には二〇〓三四歳。生き残った男たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いた。

女性たちは「良妻賢母」に育てられて、銃後をまもり、戦後は子どもを育て、戦禍を胸深く閉ざして、身をもって平和を伝えてきた。かつて大陸で「自ら生きよ」と放り出され、いままた一人暮らして「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。力をつくして高度経済成長を成し遂げた昭和五〇年―一九七五年には五〇〜六四歳だった。

＊働きづめに働いた人の本音

そのころこんな歌が歌われた。

＊「大正生まれ」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1番

♪大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ

忠君愛国そのままに お国の為に働いて

みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と

覚悟は決めていた なぁお前

2番

♪大正生まれの青春は すべて戦争（いくさ）のただ中で

戦い毎の尖兵は みな大正の俺達だ

終戦迎えたその時は 西に東に駆けまわり

苦しかったぞ なぁ前

3 番

♪大正生まれの俺達にや 再建日本の大仕事

政治、経済、教育と ただがむしやらに三十年

泣きも笑いも出つくして やつと振り向きや乱れ足

まだまだやらなきや なぁ前

4 番

♪大正生まれの俺達は 五十、六十のよい男

子供もいまではパパになり 可愛い孫も育ってる

それでもまだまだ若造だ やらねばならぬことがある

休んじやならぬぞ なぁ前

しっかりやろうぜ なぁ前

* 「大正生れの歌（女性編）」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1 番

♪大正生れのわたし達 明治の母に育てられ

勤労奉仕はあたりまえ 国防婦人のたすきがけ

みんなの為にとがんばった

これぞ大和撫子と

覚悟を決めていた　ねえあなた

2 番

♪ 大正生れのわたし達　すべて戦争（いくさ）の青春で

恋も自由もないままに　銃後の守りまかされた

終戦迎えたその時は

たのみの伴侶は帰らずに

淋しかったわ　ねえあなた

3 番

♪ 大正生れのわたし達　再建日本の女房役

姑に仕え子育てと　ただがむしやらに三十年

泣きも笑いも出つくして

やっと振り向きや白い髪

それでもやらなきや　ねえあなた

4 番

♪ 大正生れのわたし達　五十、六十のいい女

子供もよいパパママになり 可愛い孫のお守り役
いまでは嫁も強くなり
それでも引かれぬことがある
休んじやならない ねえあなた
しっかりやりましょ ねえあなた

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に亡くなった。「大正生れ」の歌は一九七六年に、「大正生れ（女性編）」は一九七九年にテイチクからレコードが出されている。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しだけ知名人をみてみよう。二ページほど紙幅をいただいで。**赤色**は平成二四年以降に他界した方、**青色**は現存の方である。

一九一二／元年 一／太田薫 二／双葉山定次、三／都留重人 四／**新藤兼人** 五／林伊佐緒
六／大友柳太朗 八／田島直人、福田恆存 九／成田知巳、松下正治 一二／木下恵介
一九一三／二年 一／荒正人、田中英光 二／中原淳一 三／尾上松緑（二代）、金田一春彦、
三・二八**篠田桃紅** 五／森繁久弥 六／杉浦民平 九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、**吉田秀和** 一〇／織田作之助

一九一四／三年 一／深沢七郎 三／丸山真男 五／前畑秀子 六／**呉清源**、霧島昇 七／木

下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四 九／宇野重吉 一一／田村魚菜
 一九一五／四年 一／むのたけじ 二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫 三／濱
 谷浩 四／飛鳥田一雄 六／和歌森太郎 九／高川格 一一／春日野八千代 一二／三笠宮崇仁
 一九一六／五年 一／福武哲彦、岡晴夫 三／有島一郎、五味川純平、芥藤茂太、岩谷時子 四
 ／木下忠司 七／坂田道太、鶴岡一人 八／藤村富美男、五島昇 一〇／渡久地政信
 一九一七／六年 一・一一日高六郎 一・一二秋山ちえ子、中村歌右衛門 二／沢村栄治、山
 田五十鈴、横山泰三 三／柴田錬三郎 四／島尾敏雄 七／浜口庫之助 一〇／角川源義
 一九一八／七年 一／小暮実千代 二／池部良 三／中村真一郎、福永武彦、升田幸三 五／
 田中角栄、五・二七中曾根康弘 七／堀田善衛、近江俊郎 九／高橋圭三 一二／高峰三枝子
 一九一九／八年 一／田端義夫 一・二三園田天光 二やなせたかし 三／水上勉 六／岩
 波雄二郎 七／長洲一二 八／大野晋 九／加藤周一、九・二三金子兜太 一一／佐治敬三
 一九二〇／九年 一／長谷川町子 二／山口淑子 三／川上哲治 四／三船敏郎 五／森光子
 五／安岡章太郎 六／秋山庄太郎、梅棹忠夫 七／竹内均 一二・二四阿川弘之
 一九二一／一〇年 一／谷桃子、吉田正、盛田昭夫 二／庄野潤三、大松博文 三／貝谷八百
 子 四／犬養道子 七／藤原弘達 一〇・一三塩川正十郎 一二／山本七平、五味康祐
 一九二二／一一年 一／橋川文三、二／三根山隆司、安川加寿子 三／山下清、和田寿郎 四
 ／岩井章、三浦綾子 五・一五瀬戸内寂聴 六・一八D・キーン、六／鶴見俊輔 七／丹波哲

郎 八／石井好子 九／塚本邦雄、九・一二内海桂子 一〇／別所毅彦 一二／大下弘
 一九二三／一二年 一／池波正太郎、三國連太郎 三／大山康晴、田村隆一、遠藤周作 四／
 四・一九千宗室 五／五・二四鈴木清順 八／司馬遼太郎 一一／白井義男、一一・五佐藤愛子
 一九二四／一三年 一／佐藤亮一 一・一六京極純一 二／石本美由紀、岡本喜八 二・一八
 陳舜臣、越路吹雪、淡島千景 三／安部公房、三・三村山富市、三・二五京マチ子、高峰秀子、
 高田好胤 四／團伊玖磨、吉行淳之介 六／芦野宏、六・二五丹阿彌谷津子 一〇／石橋政嗣
 一一／山崎豐子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明 一二／鶴田浩二
 一九二五／一四年 一／三島由紀夫 二／栃錦清隆、二・二七豊田章一郎 三・一二江崎玲於
 奈、三・二〇梅原猛 五・一〇橋田寿賀子 六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗 七
 ／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三色川大吉、八・二一篠原一、丸谷才一 九／杉下茂、辻邦
 生 一〇／中村雄二郎、一〇・二〇野中広務、一一・六桂米朝
 一九二六／一五年（一二月二五日）一／一・八森英恵、いいたもも、一・一二三浦朱門 二
 ／榊莫山、松谷みよ子 三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五辻久子、三・二〇安野光雅、加古
 里子 四／宮尾登美子 七／奥野健男 八／古田武彦 九・一／石井ふく子、星新一、今村昌
 平、九・一九小柴昌俊 一一／根本陸夫、一一・三〇中根千枝